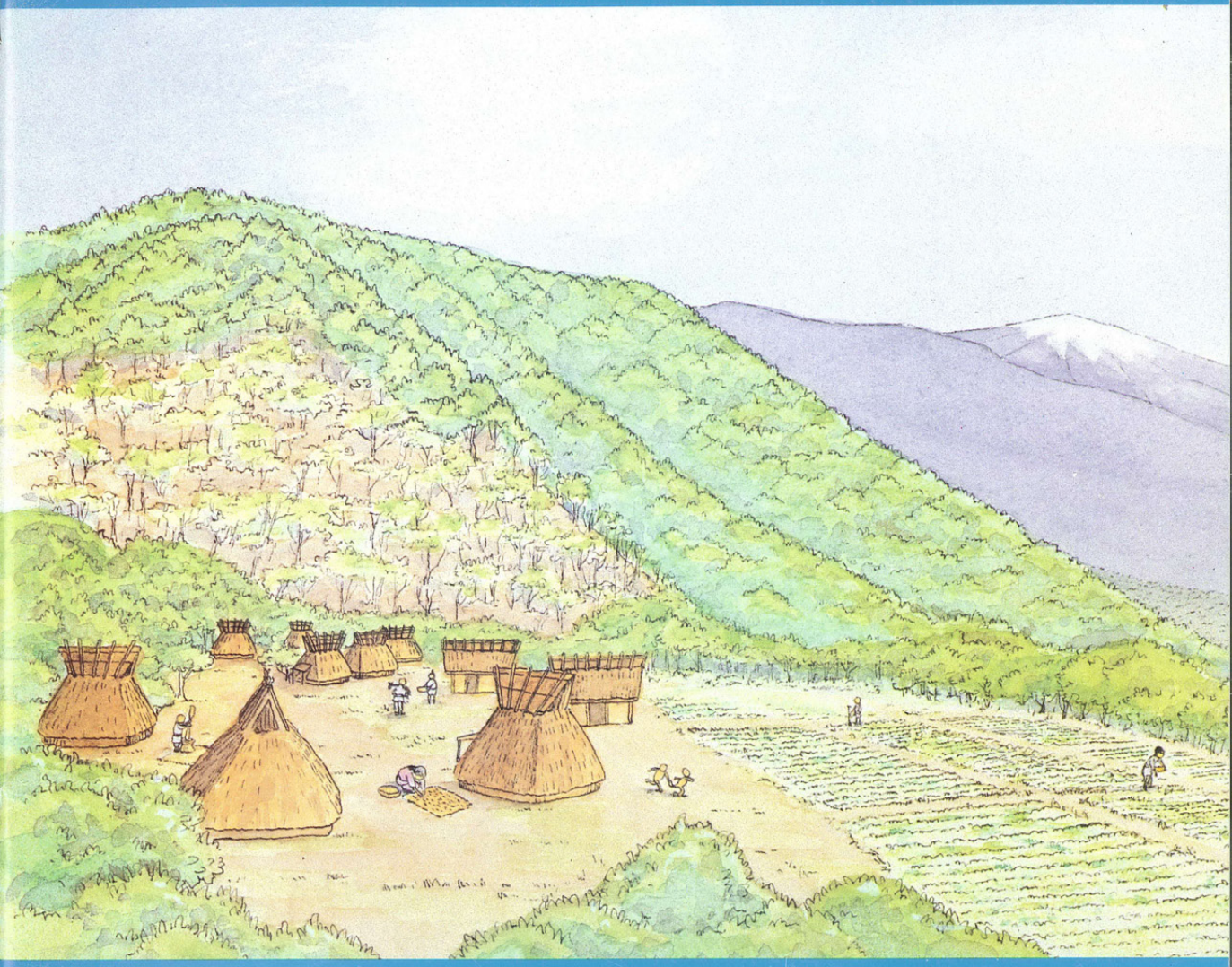
ŌMURA SITE

大村遺跡

古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査概報



松本市教育委員会

はじめに

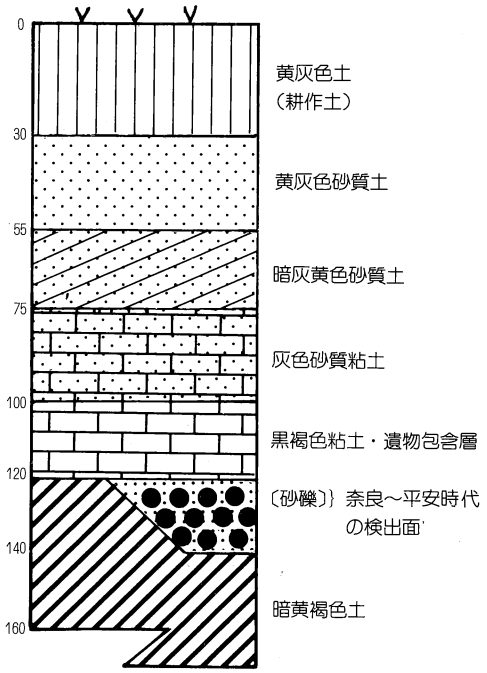
本遺跡の所在する松本市本郷大村の一帯は、以前から土師器・須恵器・灰釉陶器等や古瓦の散布があることで知られている。特に古瓦はその性格から特殊な建造物の存在を想像させ、本遺跡は古くから識者の注目を集めていた。昭和40年以降、学術調査を含む4回に亘る発掘調査が行われてきたのもそのためであり、当地方の古代史解明の鍵を握る重要遺跡のひとつといってもよいであろう。

今回の発掘調査は松本市による市営住宅団地建設に先立つもので、松本市教育委員会が実施した。調査範囲は住宅用地と付属市道の建設予定地内で、面積は約1400㎡である。調査は昭和62年5～7月にかけて行われ多くの成果を得ることができたが、本遺跡の調査は来年度以降も継続して予定されており、本書では今回の調査についてのみ概要を報告するものである。なお、本報告については継続調査終了後に行いたい。

遺跡の立地・環境

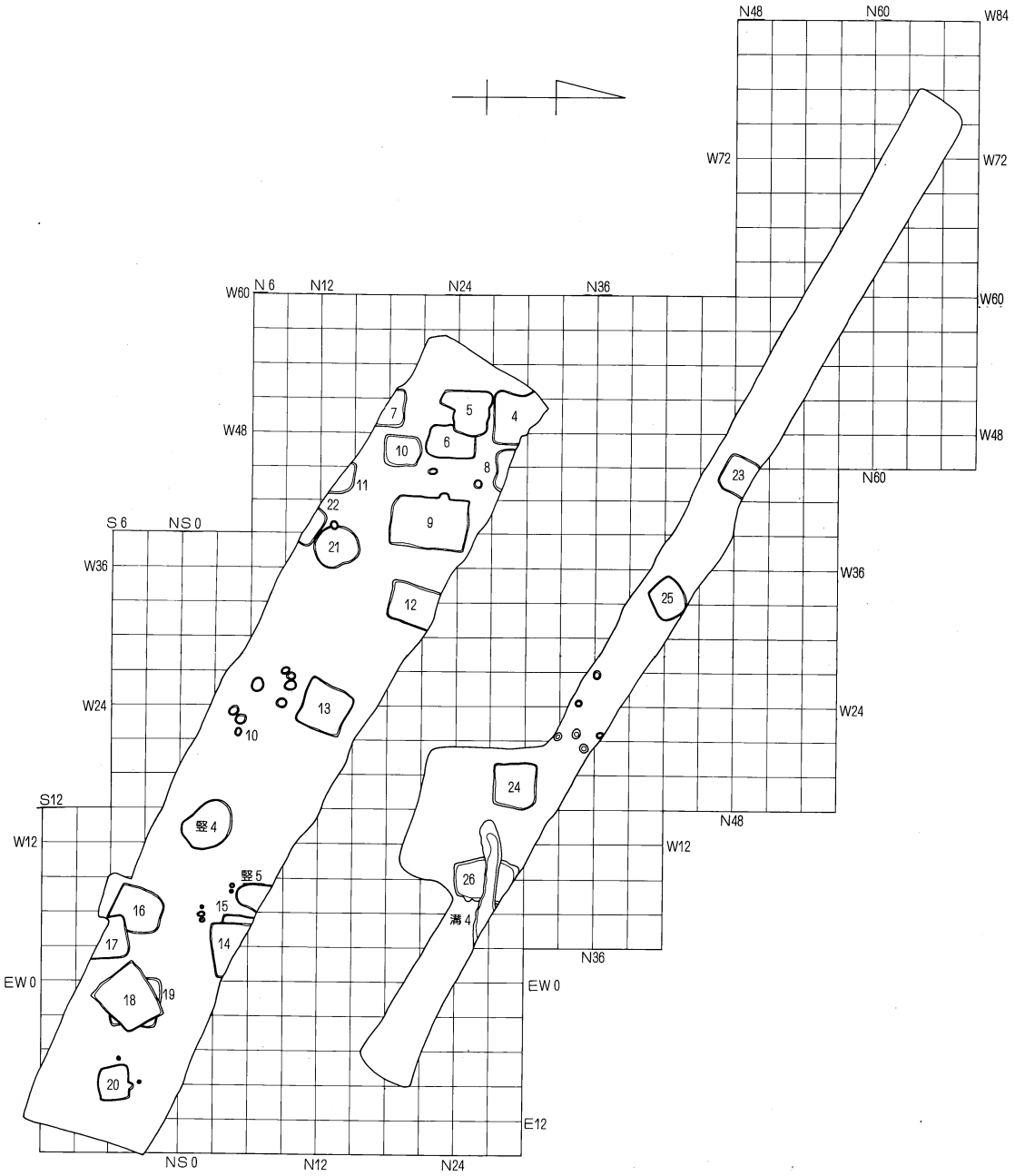
本遺跡は松本市街地の北東、浅間温泉の南にあたり、北には市営松本野球場・市営庭球場が隣接する。標高約636m前後の南へ緩く傾斜する水田地帯だが、近年宅地化が進んでいる。調査地の現況は水田であった。地質的には現在遺跡の西方300mを南流する女鳥羽川の堆積物によって形成された旧氾濫原上にあるが、遺跡のすぐ東側は東山部の山麓が迫っており、そこから西流するいくつもの沢筋が土砂を女鳥羽川の堆積物上に押し出して、この両者が混ざり合って複雑な堆積状態を形成している。遺跡一帯は水はけが悪く、じめじめとした湿地で、加工木材、自然遺物等が残りやすい状態にある。地元の製瓦業者が製瓦用粘土を採掘していたことからもわかるように、下層には良質の粘土が堆積している。

本遺跡の周辺遺跡を時代別に見ると、旧石器時代は非常に遺跡の分布が薄く、旧石器時代では東方3㎞の山中の渋池遺跡より後期の切出形石器と、縄文時代早期の土器片が採集されているのみある。縄文時代前期も同様で、本遺跡の北に隣接する新潟南裏遺跡を挙げることにとどまる。中期の遺跡は多く、隣接する柳田遺跡、女鳥羽川上流右岸の、和田遺跡、桜田遺跡、鎮守遺跡、塩辛遺跡等がある。後晩期の遺跡は少なく、前述の柳田遺跡と女鳥羽川遺跡等がある。古墳時代には浅間温泉を囲む山麓の尾根上に桜ケ丘古墳や、妙義山古墳、桃仙園古墳を代表とする多数の古墳が確認されている。このうち五世紀後半に構築されたと見られる桜ケ丘古墳からは金銅製の冠が出土しており、県宝に指定されている。平安時代になると三才山の七本松遺跡、原の宮ノ上遺跡、五反田遺跡、南浅間の国司塚遺跡等多数の遺跡が確認されている。また須恵器古窯址の存在も重要であろう。本遺跡の東に続く妙義山麓には2基が確認され、古瓦も出土している。西では岡田の田溝山田古窯址群があり40基程の所在が知られている。以上のように、本遺跡の周辺には縄文時代から平安時代の長期に亘って繰り返し集落が営まれ、特に奈良～平安時代には窯業生産も行われていたことがわかり、歴史的に重要な地域であったことが窺える。



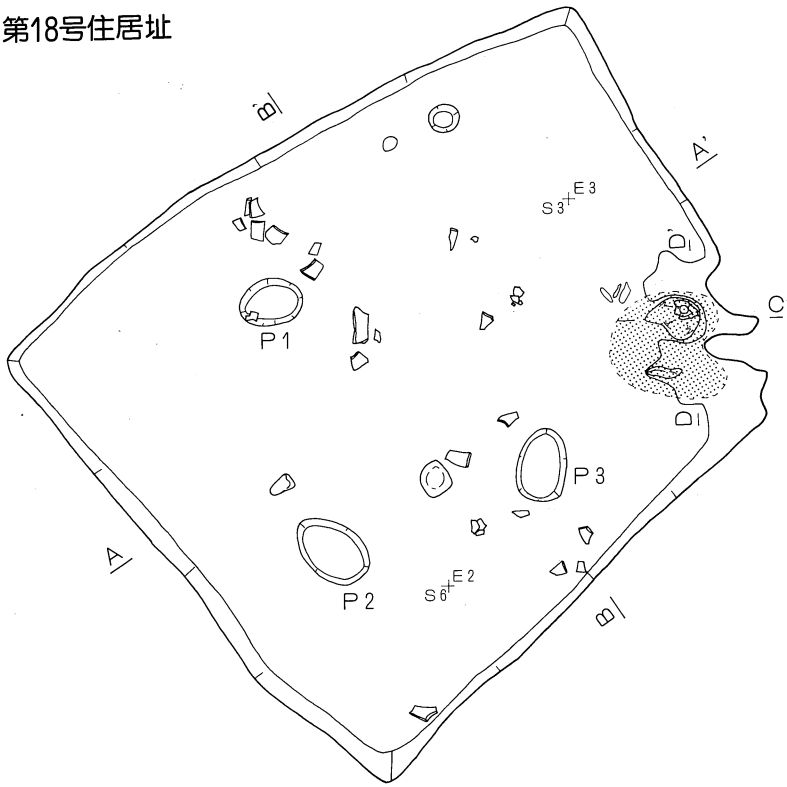
土層断面図

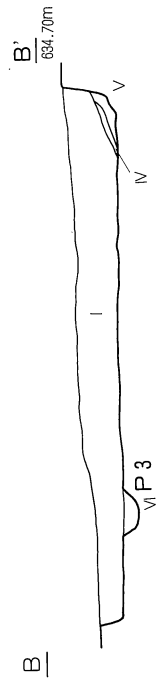
全体図

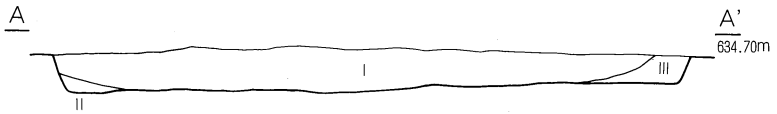


方眼は３ｍ平方
数字のみは住居址

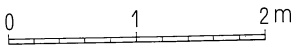
第18号住居址

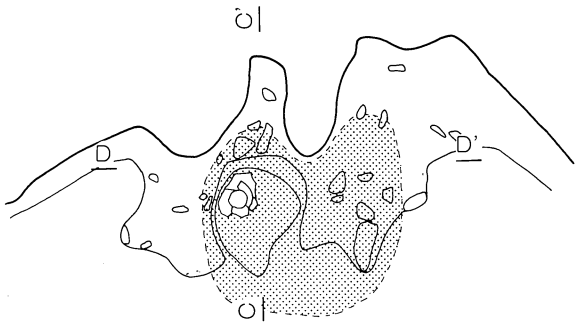


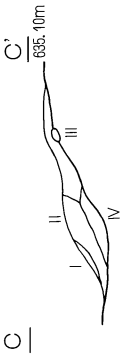




Ⅰ：暗褐色土（鉄分、２～３㎝大の礫、ローム塊混入）
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：黒褐色土
Ⅳ：暗褐色土（焼土粒多量混入）
Ⅴ：黄褐色土（焼土粒少量混入）
Ⅵ：暗褐色土（鉄分混入）

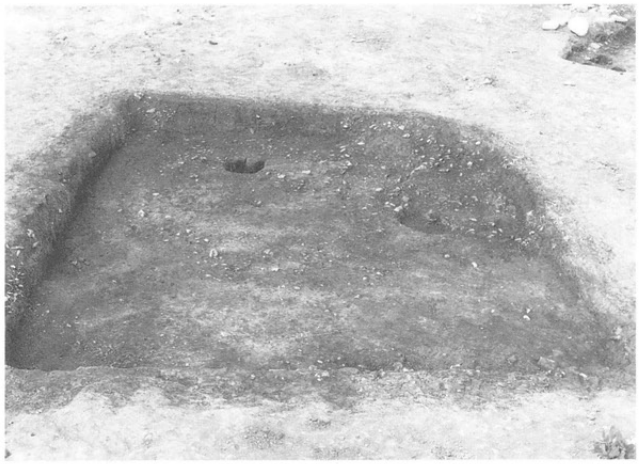




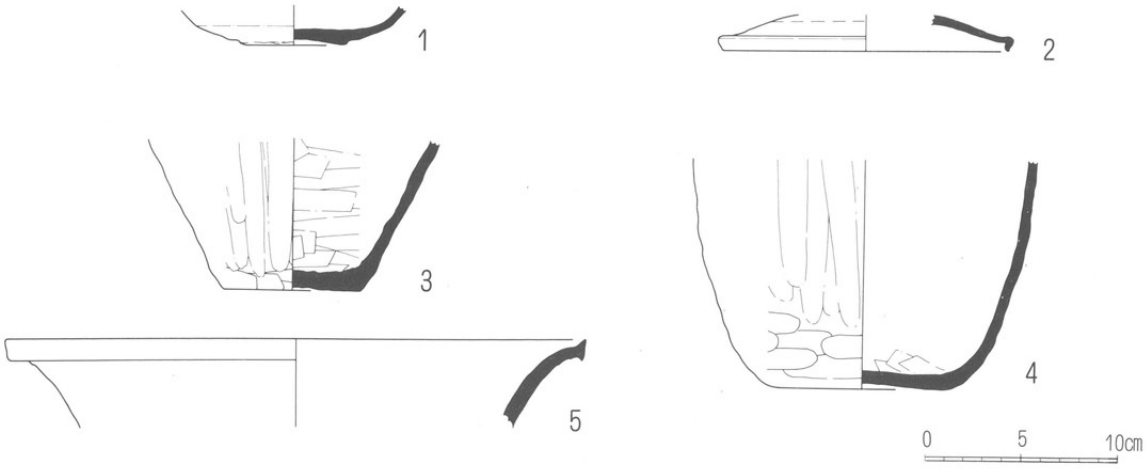


Ⅰ：黄褐色土（炭化物少量混入）
Ⅱ：〃　（0.5～3.0㎝大の焼土塊多量混入）
Ⅲ：〃　（焼土粒混入）
Ⅳ：〃　（0.5～1.0㎝大の焼土塊、炭化物混入）
Ⅴ：黒褐色土（焼土粒、１～５㎝大の礫多量混入）

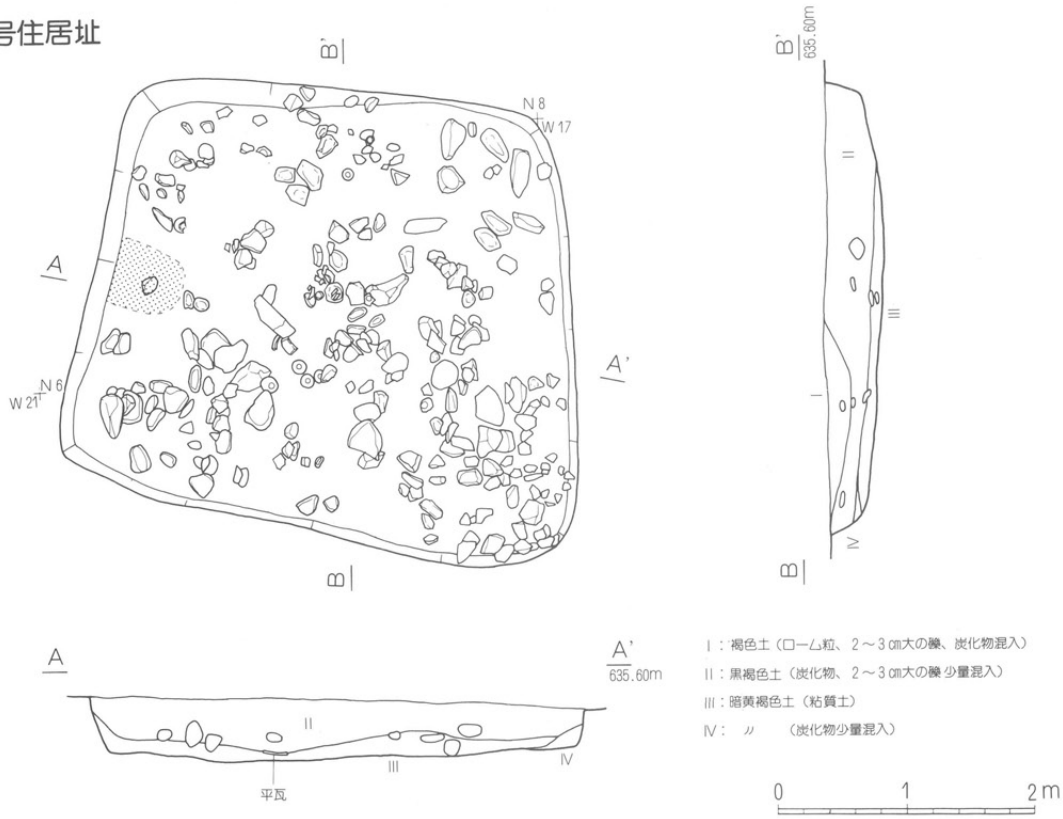
8区東部に位置する。南北5.1m、東西4.2mの長方形プランを呈し、床面積は18.6㎡を測る。壁は東壁以外はほぼ垂直に立ち上がっている。壁、床面に沿って鉄分の沈澱があり検出は容易であった。床面は全般的に黄褐色砂質土で、礫もあまり混入せず平坦で堅緻な状況を示していた。東壁の南側にはカマドが設置されており、袖は礫と粘土を混合して構築したもので、幅70cm、長さ60cmの規模をもつ。これに長さ40cmの煙道が続いていた。火床の中央には土師器の甕が2個重ねて逆位で立てられており、支脚として利用されたと考えられる。その他の施設としてピットが数個検出された。遺物は、覆土上層から土師器、須恵器、灰釉陶器等が、床面付近からは丸瓦、平瓦の破片が20点近く出土したという状況であった。当時瓦を葺いていた建造物は希であり、遺跡周辺に本址から出土した古瓦を葺いて造られた寺院、官衙等の特殊な建物があったと考えられる。住居址の床面からこのように多量の古瓦が出土したことは松本市内では初めてであり、今回の調査の中でも大きな成果のひとつとして注目したい。



出土土器（3・4：土師器、1・2・5：須恵器）

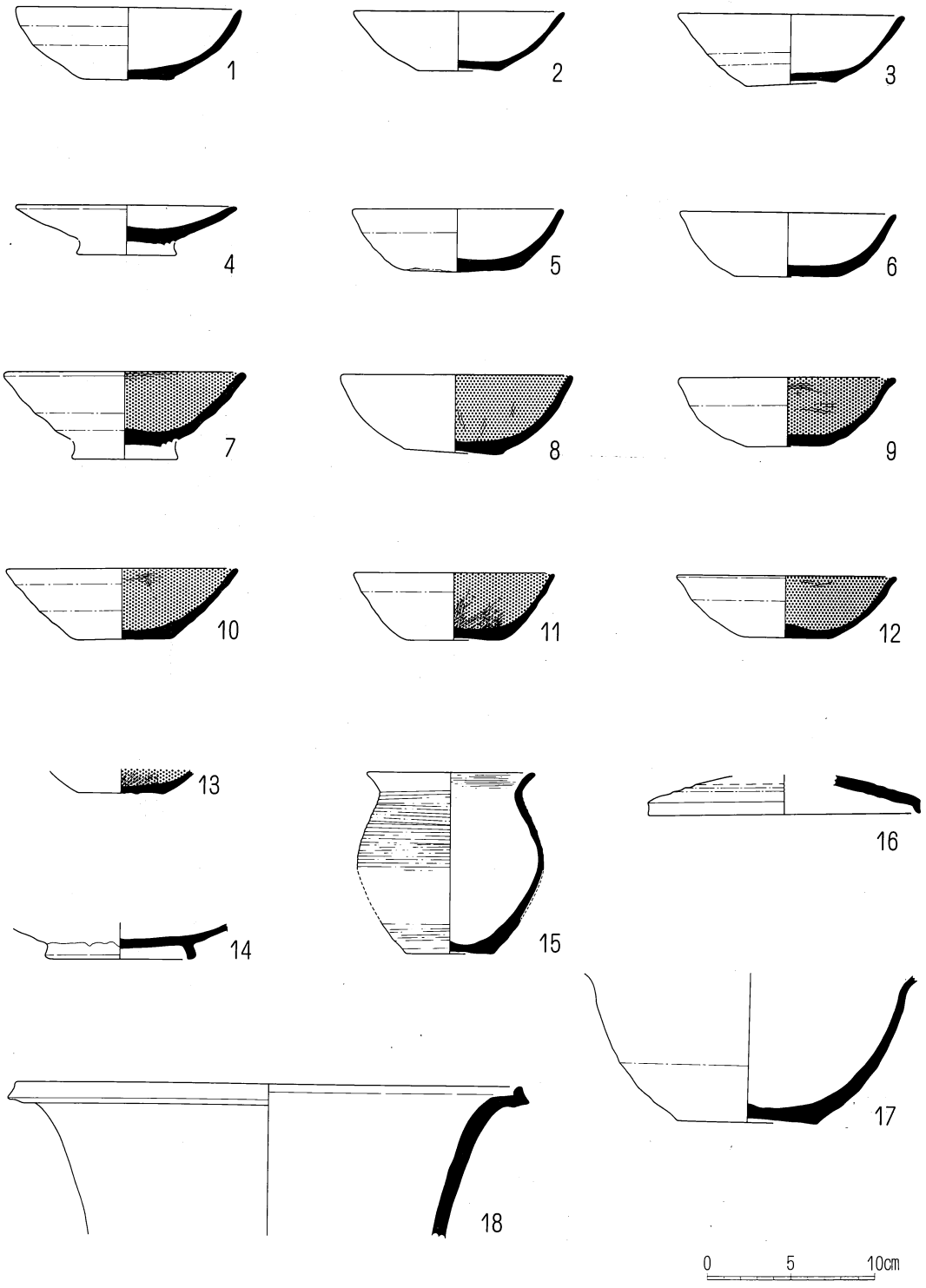


第24号住居址



9区南東部に位置する。南北3.6m、東西3.8mで床面積は11.4㎡を測る小形の住居址である。覆土掘り下げ時に、投げ込まれたと見られる20～30㎝大の礫が多数出土し、その間から多量の土器が発見された、それらの遺物をとりのぞいたところ比較的礫の少ない面が現われ、床面と推定されたが覆土と区別がつきにくいものであった。カマド・ピット等の施設は発見されなかったが、西壁直下に焼土の層が5㎝程の厚さで見られ、この位置にカマドがあったと推定する。本址は調査の終盤で発見されたため日程の都合で雨中の作業となり、床面の状態、土色等は充分確認できなかった。遺物は床面直上のほぼ全域から出土している。残存状態の良いものも多数あり、数点の坏が完形で出土した。長さ42.5㎝・幅22.5㎝を測る布目瓦の大破片は両端部が残り全形を推定復元できた貴重な例となった。

出土土器（4～13･15：土師器、1～3･16～18：須恵器、14：灰釉陶器）

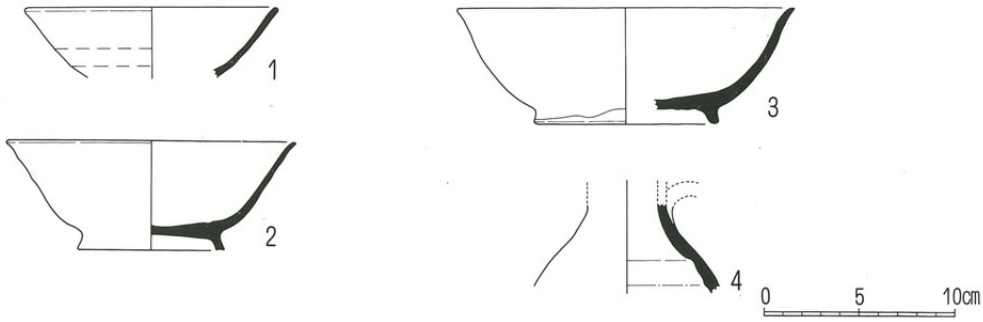


各住居址出土土師器

須恵器

緑釉陶器

各住居址出土緑釉陶器（1・2：5住、3：14住、4：12住）



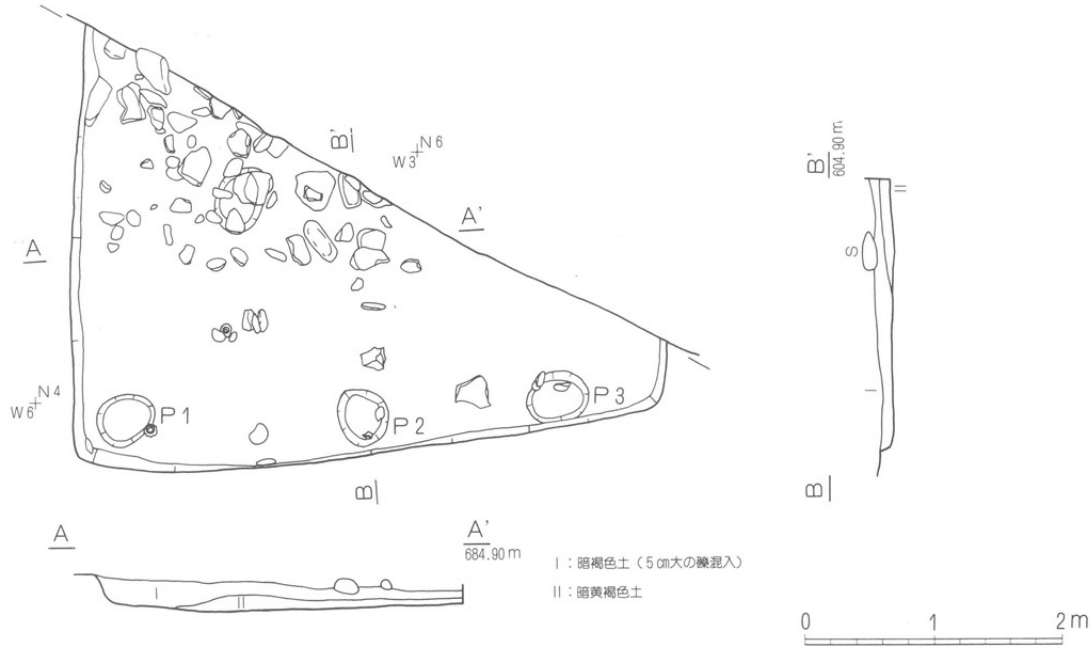
今回出土した古瓦には、平瓦・丸瓦と不明瓦質製品がある。平瓦は長方形の板の横両端が反り返った形状を呈したもので、丸瓦と共に屋根を覆う基本的な瓦である。いずれも破片だが、24号住居址から多量の土器・礫とともに投げ込まれた状況で出土した平瓦は、唯一復元可能で全長43.2cm、幅（27cm）を測る。一枚造りの平瓦で凹面は布目痕、凸面には縄叩き目痕が残っている。この他の破片では凸面の叩き目を削りとったもの・板叩き目痕があるものが見られる。丸瓦は土管を縦に2分割した形態で、平瓦の継ぎ目にかぶせた。18号住居址の床面から出土した1点が復元できている。全長43.0cm、前端幅（12.0cm）、後端幅（8.5cm）を測り、凹面は布目痕、凸面は板叩き目痕を削り取っている。その他の破片数は少ないが、すべて玉縁を持たないいわゆる行基瓦と呼ばれるものである。不明瓦質製品は裏側に2つの穴が並んであるようにも見え、鬼瓦・鴟尾の一部とも考えられるが小破片のため断定はしかねる。本遺跡出土の瓦は全体的に見て、胎土・焼成ともに良好なものが少なく、個々の瓦でも厚さが均一でなく極めて稚拙なものであった。

古瓦（上左：平瓦、上右：丸瓦、下：不明瓦質製品）

松本市古瓦出土地一覧

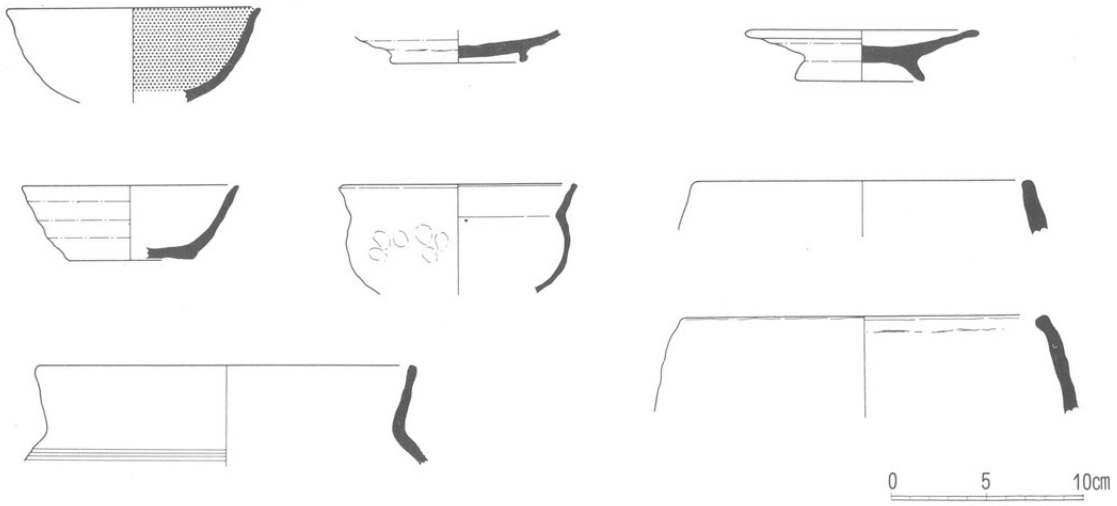
遺跡の種別	遺　跡　名		出　土　瓦
集落址	あがた（県町）遺跡	（県）	丸瓦2点
	松本工業高等学校遺跡	（筑摩）	丸瓦1点
	北栗遺跡	（島立）	丸瓦1点（28号住居址床面）
古窯址	妙義山第1号	（本郷）	
	大口沢菖蒲平第3号	（岡田）	
	田溝中の沢第8号	（岡田）	丸瓦1点　平瓦28点

第14号住居址

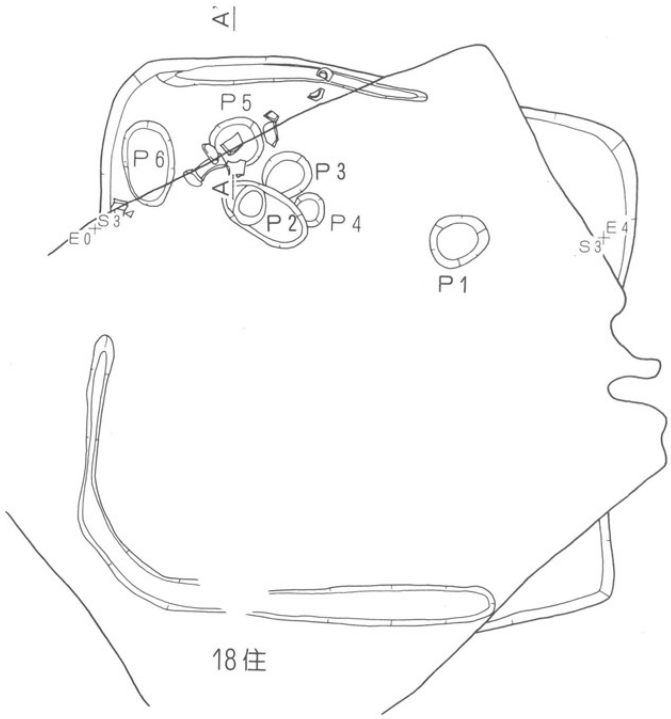


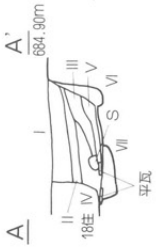
8区北東部に位置し、北側半分は調査区域外に隠れる。調査部分の床面積は9.4㎡を測る。床面・壁とも黄褐色砂質土の地山に掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ち上がるしっかりしたものであった。本址は15号住居址と重複してそのほとんどを貼っており、本址床面の方が1～4㎝程浅い。床面の状態は、比較的堅さはあるが礫が多量に混じり、決して良好とは言えない。出土遺物は緑釉陶器碗、鉄製品、不明瓦質製品の破片等が特徴的なものとして挙げられる。

出土土器



第19号住居址





Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：〃　（白色砂粒混入）
Ⅲ：〃　（焼土粒、鉄分混入）
Ⅳ：暗黄褐色土（黄色粘土塊微量混入）
Ⅴ：暗褐色土（Ⅰより暗）
Ⅵ：黄褐色土
Ⅶ：褐色土（粘土質）

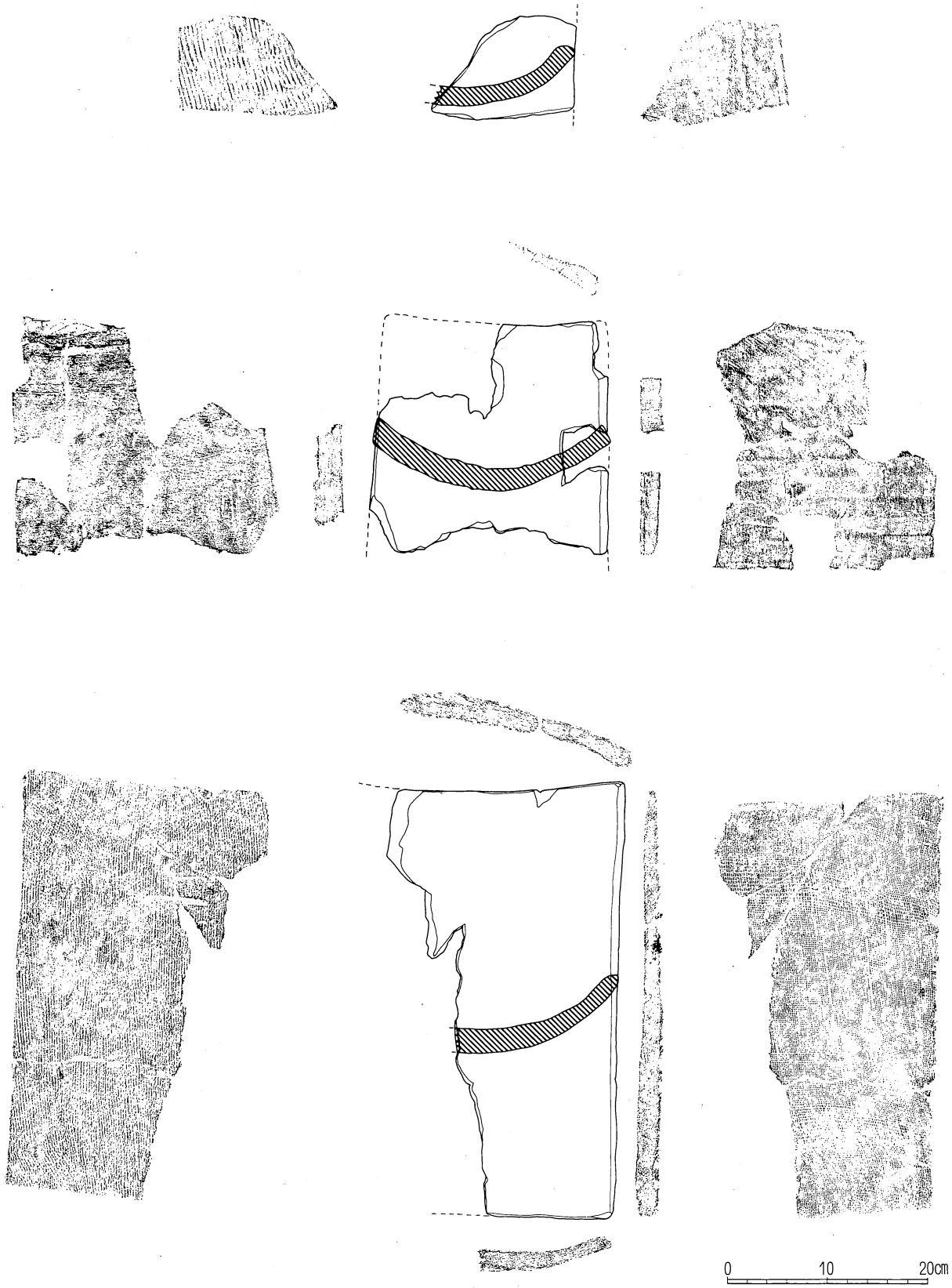
0　1　2m

8区東部に位置する。大部分を18号住居址によって貼られており、当初の壁高が残っているのは北西部のみであった。南北4.2m、東西4.0m、床面積14.8㎡の規模を持ち長方形プランを呈する住居址である。床面は黄褐色砂質土をベースとするが南東・南西隅は砂礫層が露出している。ただし若干の起伏を有するものの、堅緻な状態であった。カマドは18号住居址によって破壊されていたが、西壁付近に焼土を伴った窪みが確認され、カマドの残骸と推測された。東壁を除く壁直下に周溝がみられる。遺物は須恵器の坏、古瓦等が出土した。18号住居址と同様に須恵器等は覆土中から、古瓦は床面から出土している。

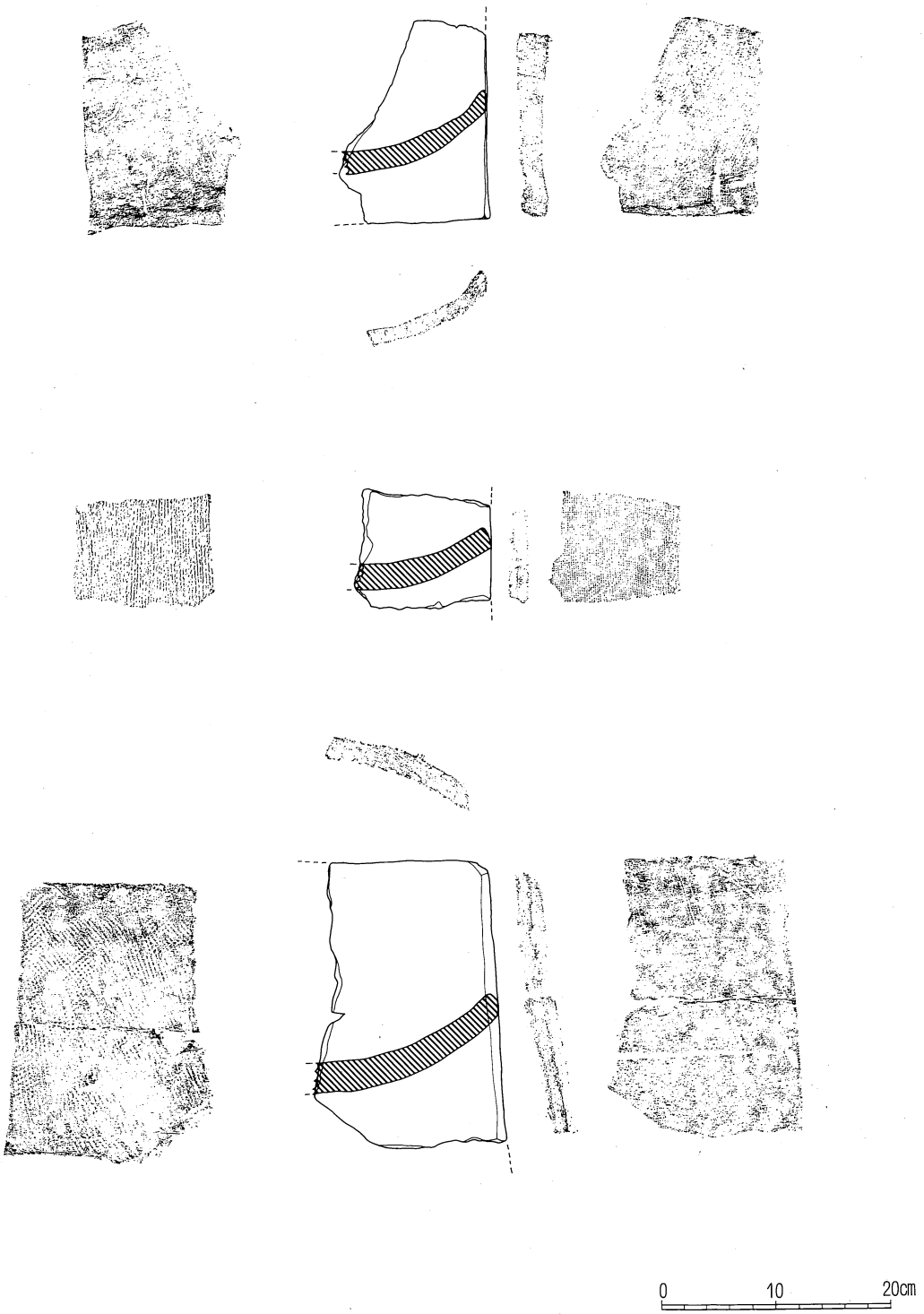
出土土器

0　5　10cm

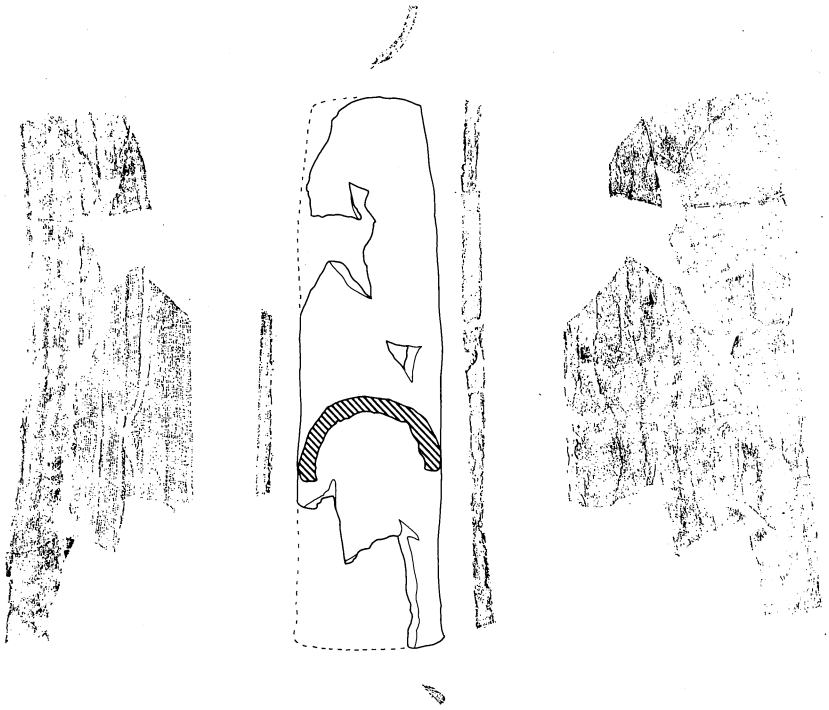
各住居址出土古瓦(平瓦)

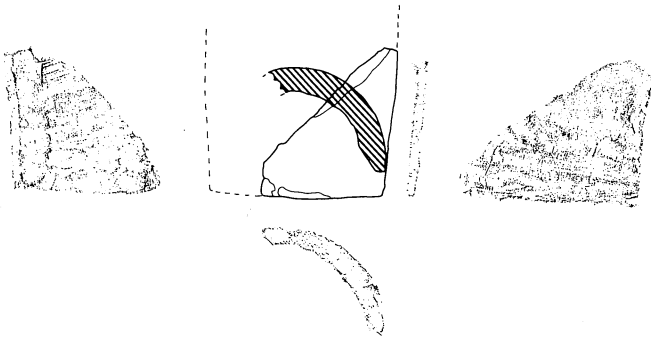


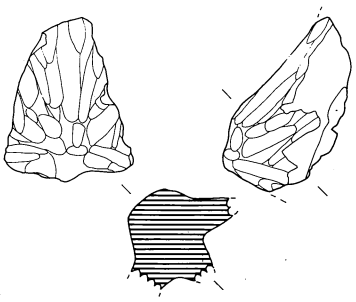
各住居址出土古瓦(平瓦)



各住居址出土古瓦(丸瓦、不明瓦質製品)







0 10 20cm

調査の成果

今回の調査では1400㎡の範囲内に竪穴住居址22軒、竪穴状遺構２基、溝址１本、土壙18基、ピット７基等が確認され、奈良～平安時代の集落址であることが判明した。住居址を中心としてこれらの各遺構からは土器・陶器・鉄製品・石器・石製品・銭貨等の遺物とともに古瓦が出土している。今回の調査で最も大きな成果は奈良～平安時代に亘る集落の一部を把握したことと、平安時代の竪穴住居址から多数の古瓦が出土したことである。古瓦は、平安時代の第14・18・19・24号住居址で出土が確認された。カマドの構築材等には利用されていないが、床面上からの出土も多く付近に瓦葺きの建造物が存在していた可能性が高い。本遺跡は前述の様に古くから注目された遺跡で、古瓦が出土することや地名に寺田・堂田・屋敷添等の寺院に関連あるものが残っていることから、当地に犬飼氏等の氏族の寺院・官衙があったのではないかと考えられてきた。しかし今まで堂田・細田地区を中心として実施されてきた５回の発掘調査では寺院址・官衙跡に直接結びつく遺構は確認されていない。今回の調査でも、全形を推定できる丸瓦・平瓦の破片を含めて多数の古瓦が出土したものの奈良～平安時代にかけての集落の一部を把握したにすぎず、出土した瓦が葺かれていた建造物の検出はなく、その性格・位置を特定することはできなかった。しかしながら付近に古瓦を葺いていた建物が存在していた可能性は濃厚であり、今後の調査に期待したい。また平安時代初期、筑摩郡に移ったといわれる信濃国府の推定地は明らかになっておらず、その点からみて本遺跡の性格を解明することは松本市北東部の開発を知るばかりではなく、更には筑摩郡の古代史を探るうえで重要であろう。

遺　構

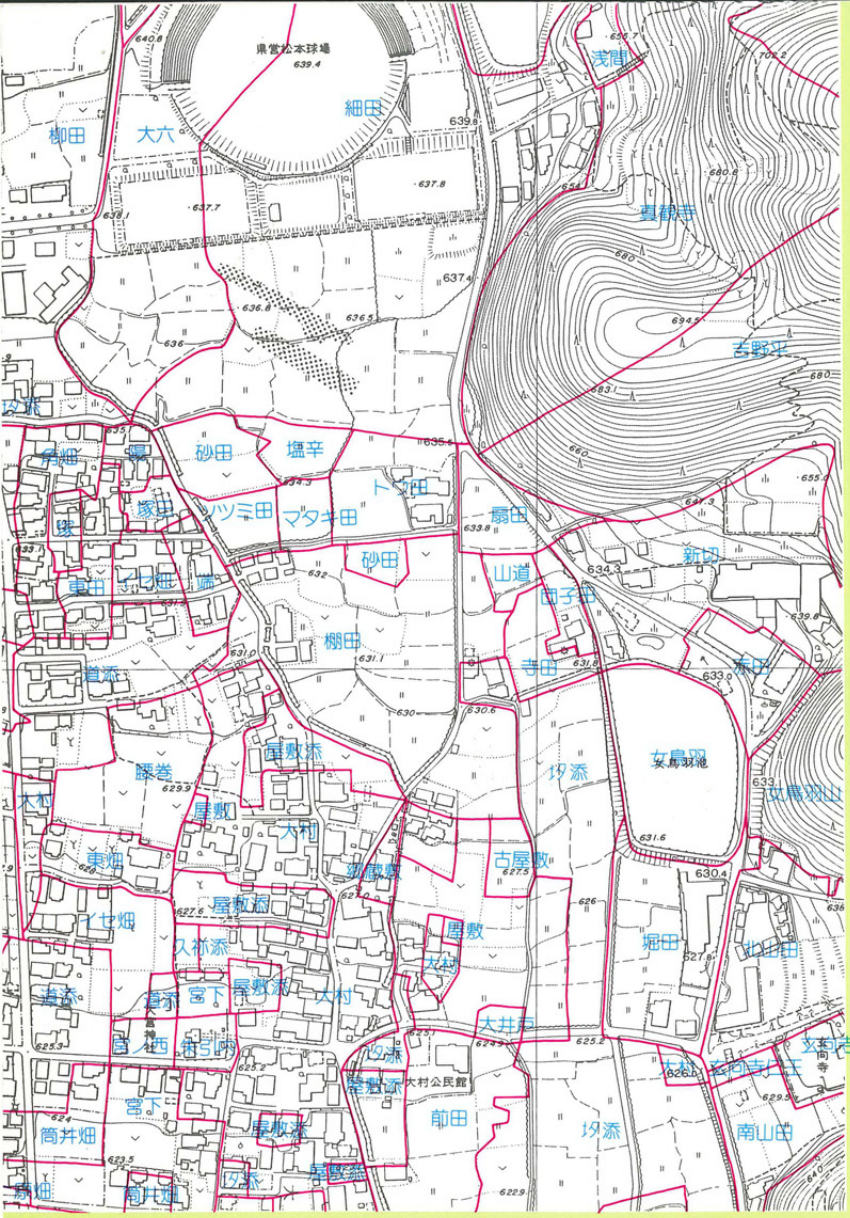
竪穴住居址	22軒
竪穴状遺構	２基
溝　址	１本
土　壙	18基
ピット	７基

遺　物

土器・陶器	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器
古　瓦	平瓦・丸瓦・不明瓦質製品
石器・石製品	石鏃・凹石・窪みのある平石
鉄　器	釘・紡錘車・器種不明品

大村遺跡の過去の調査

年度	調査名および事項	調査者	発見された遺構	出土遺物
1950	柱根の調査	大場磐雄 藤島亥治郎	掘立柱建物址１	
1951	出土瓦の調査	石田茂作		
1965	新産都市指定地区埋蔵文化財緊急分布調査	原　嘉藤	暗渠排水	平瓦・丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器・灰釉陶器・宋銭
1966	学術調査	内藤正恒		平瓦・丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・自然遺物
1986	開発に伴う確認調査	松本市教育委員会	竪穴住居址１、掘立柱建物址４、柱列３、竪穴状遺構１、溝３	平瓦・丸瓦・土師器・須恵器・灰釉陶器・打製石斧・加工木材・自然遺物等
1987	庭球場建設に伴う緊急調査	松本市教育委員会	竪穴住居址２、土壙１	土師器・須恵器・灰釉陶器・帯金具等
1988	市営住宅建設に伴う緊急調査	松本市教育委員会	竪穴住居址22、竪穴状遺構２、溝１、土壙18	平瓦・丸瓦・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・石鏃・鉄製品等



調査範囲

1:2,500

遺　跡　名　大村遺跡

遺跡台帳No.　松本市64-117

（長野県市町村遺跡一覧表）

松本市110（長野県史番号）

調　査　地　長野県松本市大字浅間温泉字細田430の1

調査期間　昭和63年5月16日から7月16日

調査原因　市営住宅建設に伴う緊急発掘調査

調査主体　松本市教育委員会

大　村　遺　跡

古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査概報

平成元年6月30日発行

発行　松本市教育委員会

〒390　松本市丸の内3－7

TEL　0263（34）3000

印刷　精美堂印刷株式会社